

『箸休めに乾杯』

一井亮治

1, 145文字

あらすじ

日本料理店で女三人が意中の男を出し抜かれたと愚痴っている。他方、隣の会席でテレビ番組の脚本チームの二人が連載の構想について話し合っている。そんな折に出された箸休めに口の中を一旦さっぱりさせ主題となる料理を引き立てる役割がある事を知り、それぞれがそこに共通点を見出すのだった。



「何で『あの女』なのよ」

日本料理店のカウンターで女三人がかしましい。意中の男を事もあろうに自分達が見下していた地味な女に出し抜かれてしまったのだ。

「もうやってらんないわよ」

一人の女が女将に料理の催促をした。女将は、やれやれといった感じに箸休めの汁物を出した。そこでふと、もう一人の女が呟いた。

「そーいや何で箸休めっていうの？」



丁度、その頃、となりの会席ではテレビ番組の脚本チームの二人が連載の構想を話し合っていた。

「次の展開、どうしたらいいと思う？」

「このペースでいいんじゃない」

「うーん、ちょっと大型アクションシーンの後だし、またアクションだと視聴者が疲れちゃうだろう」

「かと言って飽きられるのも困るしね」

「とにかくメインストーリーを新鮮に見てもらう意味でも一旦、箸休めの回はいるね」

そこで一呼吸置いた二人は、箸休めの汁物を食べながら呟いた。

「そーいや箸休めってどういう意味かね？」



女三人は、スマホで『箸休め』を調べ始めた。

「日本料理中に見られる料理の一形態」

「食事の途中で気分転換や口の中をさっぱりさせる役割を持つ」

「料理をキレイに味わうための引き立て役……か」

急に三人は、静かになった。確かに『あの女』には、そういうところがあった。『あの女』がいると気まづくなった場の雰囲気キレイにキャンセルしたり、切り替えたりしたいときに便利なのだ。

「そういう役割も必要だよ、ね」

しばらくの沈黙の後、一人の女がムクッと上体を起こした。

「もう終わったことよ。忘れましょ」

残り二人が続いた。

「そうよ。この食事が私達の箸休めだわ」

「キレイさっぱり忘れて次の恋に切り替えるわよ」

改めて乾杯する三人だった。



丁度、その頃、隣の会席で脚本チームがスマホで『箸休め』を検索していた。

「主題となる料理を引き立てるために出される小品料理」

「食事の途中で気分転換や口の中をさっぱりさせる。料理をキレイな気分で食べるための献立の工夫……」

二人は、笑った。

「何だ、日本料理も脚本と同じじゃないか」

「酒肴ではこういった小品料理で酒を楽しむ意味となって、引き立て役が主役扱いになるところが面白いね」

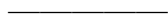
一人が大きくうなずきながら言った。

「時代は、こっちだね。動画をテレビではなくスマホで見る様になっていく中、三十分や一時間といった枠ではなく、分単位、いや秒単位の視聴になっていく」

「連載ものだけじゃなく、ショートムービーも勉強していかないといけないね」

そこで脚本チームの二人は、改めて乾杯した。

「頑張りましょう」



閉店後、綺麗に店を掃除する店員に大将が言った。

「掃除も料理をキレイに食べてもらうための立派なサービスだぞ」

やがて、掃除を終え、最後となった店員は、一息つくと一人、夜空に乾杯しビールを飲み干すのだった。